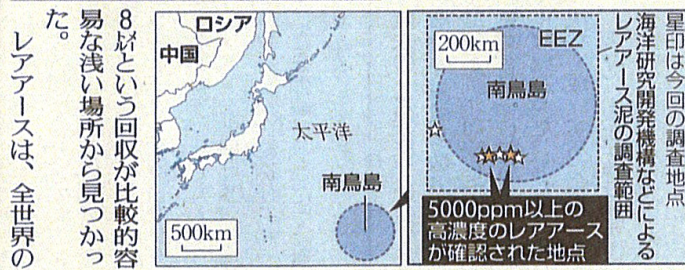


南鳥島 高濃度レアアース

中国陸上鉱床の10倍

小笠原諸島の南鳥島で今年1月下旬に実施されたレアアース(希土類)泥の分布調査で、海底から回収した堆積物に最大で6500ppm(一万ppmが1%)という高い濃度のレアアースが含まれていたとする分析結果を、海洋研究開発機構、東京大学の研究チームがまとめた。最大産地・中国の陸上鉱床は500~1000ppm程度で、今回はそれよりも10倍ほど高い濃度という。研究チームが21日午後、発表した。

レアアース泥は、ハイブリッド車、液晶ディスプレイなどに用いられるジスプロシウムやテルビウムなどの希少な金属を多く含んだ泥状の堆積物で、太平洋の海底下に広く分布している。研究チームは1月下旬、海洋機構の深海調査船「かいれい」で、南鳥島の南側の排他的経済水域(EEZ)を中心に、水深5600~5800mの海底6か所にパイプ状の機器を入れて、堆積物を採取した。分析した結果、2か所の地点の泥で、5000ppm以上の濃度のレアアースが含まれていることが確認されたという。これらは、海底下約3~



生産の9割以上を中国が占めており、価格の高騰や供給が不安定になるおそれ指摘されている。このため、政府ではほかの国からの調達交渉を進めたり、民間企業が海底油田開発のノウハウを生かした回収技術の検討を行ったりしている。政府は、策定中の「海洋

基本計画」の開発目標のひとつに、今回のレアアース泥を盛り込むことを検討している。今後、分布調査や技術開発に本腰を入れる可能性もある。一方、水深5000m超の海洋資源開発は世界で前



南鳥島 (2012年11月撮影)

南鳥島 日本の最も東側に位置する島で、東京から南東に約1900km・北離れている。1辺が約2kmの正三角形の形状をしており、サンゴが隆起してできた。気象庁職員や海上自衛隊員が常駐する施設も備わっている。

例はなく、回収に使う材料の開発や開発に伴う生態系への影響などの課題もある。

レアアース泥は、東大の加藤泰浩教授らが過去の国際深海掘削調査で得られた試料を分析し、昨年、南鳥島沖での存在を明らかにした。詳しい分布状況はわかっていない。